家庭数配布

学校だより

子どもの「やる気」を育てます

９月号　　令和７年９月１日
西東京市立保谷第一小学校
校　長　　原　　之　雄
〒202-0004　西東京市下保谷1-4-4
TEL042-422-4513　FAX042-424-7117
http://www.nishitokyo.ed.jp/e-houya1/
e-mail e-houya1@nishitokyo.ed.jp

保谷第一小ホームページ
QRコード

寛容であること

校長　原　　之雄

私は、ヤクルトファンで、ジャイアンツのことは詳しくないのですが、6 月に長嶋茂雄終身名誉監督が他界されたことには感慨を覚えました。長嶋監督の現役時代は知らないのですが、その薫陶を受けた中畑選手、篠塚選手らをテレビのナイター中継でよく見ていたからです。

その中畑清さんが、生前の長嶋監督を懐かしみながらこんな発言をしています。「人の話を聞かない、反省しない、我が道を行く…でも、それが本当に魅力的だった。」

私は学生時代、山登りを少々しておりました。当時はバブル真っただ中、社会全体が浮かれた雰囲気で、学生もごく普通に車にのり、DC ブランドを着て、夏はテニス、冬はスキーと青春を謳歌する、そんな時代でした。そんな時代に、きつい、汚い、危険の 3 拍子そろった登山、何が楽しいの？と冷ややかな視線を感じつつも、本人たちは、「親のお金で車に乗って、高い服買って格好つけるのってどうなの？」と反骨精神なのか、単なる僻(ひがみ)み、嫉(そねみ)みの類(たぐい)なのかよく分からない感情を抱きながら、汚い格好で、しかし自由気ままに過ごしておりました。そんな部ですから、そこに集まる人間は男女問わずきわめて個性的…有体に言って奇人変人ばかりでした。常に登山用の雨具を着て、肩にはデイパック…一年中同じ格好で、何故か夕方授業が終わるころになると現れ、「忙しい、忙しい」とひとしきり愚痴を言ってはまた下宿に帰っていく人、よく分からない専門書を読んでは悦に入り、難解な議論を吹っかけては周りから顰蹙を買う人、「多様性」という言葉を使うまでもなく多様でした。

では、そのような人間同士、衝突はしなかったのか、というと当然ながら時に激しくぶつかりました。一杯入ると長時間の口論になることもしばしばで、いわゆる「みんな仲良しの楽しい部」では全くありませんでした。では、不仲だったのか、というとそれもまた違う気がするのです。「まったくもう…！」と思ったり言ったりしつつも、最終的には相手を受け入れていた、自分も受け入れられていた…「本当に腹立たしいけど、まあ、しょうがないか…。」

当時は気づきませんでしたが、人間の「業の深さ、どうしようもなさ」を半ば認め合っていた、すなわち互いに対して寛容であったと思うのです。

相手が自分にとってよい人間（よい人柄）だから仲良くなる、友達になるのか、自分と同じ価値観だから深い付き合いができるのか。一般的にはそうなのでしょう。しかしそれだけではない気もするのです。同じ時間を共に過ごす中で、良いも悪いもひっくるめて受け入れる、受け入れられる、そんな関係もあるのではないか、いわば時が熟すことによって深い関係が生まれる、そんなこともあるのではないでしょうか。

閑話休題。最近、SNS 等での各種の発信、発言を見ていて思うこと…一見もっともな社会的ルール、誰も正面からは批判できなさそうな倫理観を振りかざし、相手を論破する、徹底的に断罪する風潮があるのではないか。相手との時間の共有や体験の共有がないままに、言葉のみの力で、同質性や異質性を考慮せずに相手をやり込める…使われる言葉は一見的確に見えるがその割に内実が乏しく感じられるのは、人間同士の「寛容さ」が失われているからではないか。

SNS 等を否定するつもりは全くないのですが、人格形成の初期段階である学童期には直接的なかかわりをたくさん経験してほしいですし、子供たちには「寛容さ」のもつ豊かさにぜひ気付いてほしいのです。子供たちは将来、様々な人に出会うでしょう。タイパ、コスパではなく時間をかけて付き合うこと、人と時間を共有することを大切にしてほしい、そして人と深く付き合うことから逃げないでほしい、そんなことを考えた夏休みでした。